



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ 白駒妃登美

施薬院や悲田院を設置し、病人や孤児、身寄りのない貧しい人々に救いの手を差し伸べられた光明皇后。仏さまをも感動させる慈悲深さを持った一方で、ちまたでは黒い疑いをかけられていたということを、皆さまご存じでしょうか。

それは彼女の置かれた立場に原因がありました。そもそも彼女の父親は藤原不比等といい、「大化の改新」の立役者の一人、藤原（中臣）鎌足の息子でした。藤原氏は平安時代に栄華を極めた家柄ですが、その土台を築いたのが彼女の父親だったのです。

そんな当りきつてのやり手政治家を父に持ち、皇族ではない藤原氏出身の彼女が皇后の座に就いたということ、その背後には陰謀があったのではないかと、というのが

### ＊泥沼で花を咲かせる

## 内に秘めたる心の強さ

### 慈悲深さの象徴・光明皇后 ②

噂の内容でした。

当時は現代とは風習が異なり、天皇には複数の后きさきがいて、その中から最上位者がただ一人、皇后に選ばれることになっていました。美貌びぼうと聡明さを併せ持ち、一族の期待の星である彼女になんとしても皇后になってもらいたい……そういう思いを父親や兄弟は当然持っていたでしょう。

彼女が皇后となり、彼女の生んだ子が後に天皇となれば、藤原氏が絶大な権力を握れるからです。けれども当時は皇后の位くらひに就けるのは皇族のみという不文律ふぶんりつがあり、それを理由に彼女の立后りこうに反対する勢力がありました。

そうした中、七二九年、その反対派の筆頭だった長屋王ながやおうが自害じがい。彼の死により反対派は縮小し、藤原氏が一気に勢力を広げるという流れになっていくのです。

光明皇后 (701-760)  
奈良時代の聖武天皇(第45代)の皇后。初めて皇族以外から皇后となり、政略結婚という誹謗を受けながらも、貧しい人々に施しを与え続けた。



【イメージイラスト】アオジマイコ